第三十八回

松山喜多流能

令和六年七月十四日(日)午後一時始

松山市民会館小ホール能舞台

東岸居士　金子龍晟

砧　金子敬一郎

仏師　古川喜郎

主な出演者（人間国宝）（重要無形文化財総合認定者）

シテ方 喜多流
金子敬一郎　金子龍晟
塩津哲生
中村邦生　長島茂　狩野了一　友枝雄人　内田成信　佐々木多門　大島輝久　友枝真也
塩津圭介　佐藤寛泰　谷友矩　狩野祐一

ワキ方 下掛宝生流
宝生欣哉　坂苗融

大鼓方 葛野流
亀井広忠

小鼓方 幸流
曾和正博　曽和伊喜夫

笛方 森田流
槻宅聡

太鼓方 金春流
前川光長

狂言方 大蔵流
古川道郎　古川喜郎

チケット申込・お問合せ先

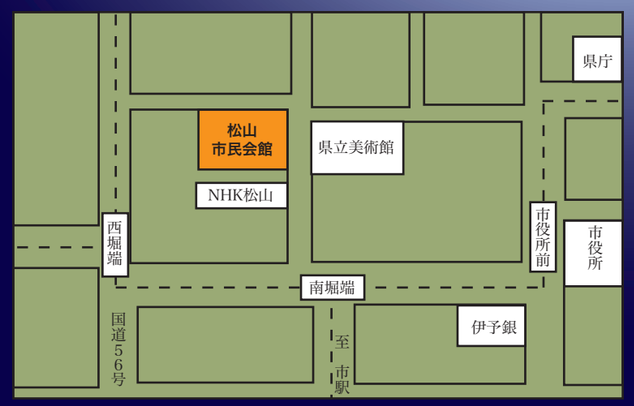
鑑賞券8,000円　学生券2,000円（25才未満）

TEL 070-2402-4719（愛媛喜多会）
Web: https://kita-kaneko.com/
E-Mail: ticket@kita-kaneko.com

会場

松山市民会館
小ホール能舞台

愛媛県松山市堀之内
TEL 089-931-8181



主催　愛媛喜多会

後援　愛媛県・愛媛県教育委員会
松山市・松山市教育委員会
愛媛新聞社・南海放送株式会社
テレビ愛媛・あいテレビ
愛媛CATV
（公社）愛媛能楽協会

許可無き者の演能中の写真撮影、録音、録画は固くお断り致します。

番組

…解説…大島輝久

能
東岸居士

シテ・東岸居士 金子龍晟
ワキ・旅人 宝生欣哉
アイ・清水寺門前の者 古川喜郎
後見 狩野了一 内田成信
大鼓 亀井広忠
小鼓 曽和伊喜夫
笛 槻宅聡
地謡 狩野祐一 大島輝久 塩津圭介 友枝雄人 友枝真也 中村邦生 佐藤寛泰 佐々木多門

…休憩二十分…

狂言
仏師

古川喜郎 古川道郎

…休憩十分…

能
砧

シテ連・夕霧 谷友矩
後シテ・前同人の霊 前シテ・蘆屋某の妻 金子敬一郎
ワキ・蘆屋某 宝生欣哉
ワキ連・従者 坂苗融
アイ・蘆屋某の下人 古川七郎
後見 塩津哲生 友枝雄人
大鼓 亀井広忠
小鼓 曽和正博
太鼓 前川光長
笛 槻宅聡
地謡 塩津圭介 狩野了一 大島輝久 長島茂 佐藤寛泰 内田成信 狩野祐一 佐々木多門

終了予定 午後5時頃

東岸居士(とうがんこじ)
東国から旅人が清水寺に参る途中、白河の橋の畔で東岸居士に出会う。今日の説法を尋ねると、居士は特に変わったところもなく、物事は目の前に見える有様なのだから「柳は緑、花は紅」と仏の教えにある通りであると答える。更に旅人が白川の橋を誰が架けたのかを問えば、先師の自然居士が仏縁の無い衆生のために寄進させて架けた橋であることを教え、今もこうして勧進しているのだと言う。また居士は、住む所が無く出家ということもないので髪も剃らず、墨染の衣も着けずにいる。そしてどうぞあなたも悟りの境地に至りなさいと勧める。居士は、旅人に面白く歌って聞かせてほしいと請われるままに、快く舞い、また羯鼓も打って見せ、悟りの道に入ろうと説いて聞かせる。

仏師(ぶっし)
自宅に持仏堂を建てた田舎者が、お堂に収める仏像を買い求めに都へ行くが、なかなか仏師をみつけることが出来ない。そこに現れた自分が仏師だと嘘を付いた都のすっぱ(詐欺師)は、仏像は翌日出来上がるから取りに来るようういう。翌日、田舎者が出来上がった仏像を拝みに行くと、なにやら印相がおかしい。手直ししてもらおうと仏師を呼ぶと、あわてて現れた仏師がすぐに「直った」と答える。田舎者が再び見に行くと、やはり気に入らない。また仏師を呼ぶと、大変あわててあらわれる仏師。田舎者の「印相が気に入らない」と、仏師の「直った」が繰り返されていくうちに…。

砧(きぬた)
九州の芦屋某が訴訟のために上京して三年目の秋、夫の帰国を待ちわびている妻の元へ侍女の夕霧が一人だけ帰郷する。妻は夕霧の都住まいをうらやみ、夫の心を信じた自らの愚かさを嘆く。折しも里人の打つ砧の音が聞こえてくる。妻は中国の蘇武の故事を思い出す。北国の胡国に捕らわれた蘇武を思いやり、故郷の妻が高楼に上って砧を打ったところ、その音が蘇武に届いた謂れに沿って妻は自分も砧を打って心を慰めようとします。しみじみとした秋の夜、妻は砧の音を風に乗せるように、夫への思慕を込めて砧を打つ。しかし、妻のもとに今年の暮れも帰国できないという夫の知らせが届き、絶望のあまりに妻は命を落としてしまう。
帰国した夫がそれを知って弔うと、妻の亡霊がやつれ果てた姿で現われます。妻は、恋慕の執心にかられたまま死んだために、地獄に落ちていたのですが、いまだに夫が忘れられず、恋と怨みの同居するやるせなさを夫に訴え、そのつれなさを責めますが、夫の読経の功徳で成仏します。
本作は、作者の世阿弥自身が「後世の人はこの能の味わいがわからないだろう」と述べたほどの自信作。
前場では、待つ女の恋慕の悲しみ・焦燥・忘却への怨み、そうした生々しい人間的な苦悩を詩情豊かに描いている。打つ砧に怨みを託しながらも、夫の帰郷に望みを抱いていることもあり、月に興じたり、夫への愛着をも感じさせる。しかし後場では、絶望しきった妻の亡霊が現われて夫の不実を責め立て、観る者に妻の執心が押し迫る。